



連続性



川崎ゆきお

「日々思うことがある」

「はい」

「それは昔から思い続けておる」

「昔から気になることがあるのですか」

「いや、一つのことではない。いろいろだ」

「はい」

「昔、思ったことも忘れてはいないのだが、殆ど忘れてる」

「何を思われるのですか」

「ああ、いろいろだ」

「はい」

「思ってる自分は同じなので、思い続けておるのだろうか」

「あ、はい。意識がある間は、いろいろと思うところのものがあるでしょう」

「そのねえ」

「はい」

「連続して思い続けている私は、それがあから私なのではないかと思うんだ」

「思いが重なりますが」

「重湯のようにね」

「あああ、はいはい」

「過去を忘れると、私じゃなくなるのかというと、そうでもないが、過去の記憶があるから、私の今が何となくあることが分かる」

「でも、記憶喪失した人はどうなります」

「それは忘れただけで、思い出せるかもしれん。その瞬間言葉も忘れてはいないし、ご飯の食べ方も忘れてはいないだろう。男か女なのかも思い出さなくても分かっておる」

「じゃ、一部記憶喪失なんですね」

「自分の名前を忘れても、自分が自分であることは知っておる」

「僕は自分の名前を漢字で書くとき、分からなくなりました」

「ほう」

「長く手書きで書いていなかったもので、漢字をかなり忘れてます。読めますが、書けません。それで、自分の名前も」

「ほう」

「でも続けて一気に書けば書けるのです」

「うむ」

「ところが、一字だけになると、どんどん不安になってきて、こういう字だったかなと……」

「一字じゃなく、連続してなら書けるといのがミソだな」

「はい」

「まあ、使わない記憶は忘れやすいということだ」

「はい」

「それよりも、私は小さい頃からずっと思い続けている。それは連続している。ずっと起きておるわけじゃないから、そこで途切れるがね。だから、ずっと自分 をやっておるということだ。この自分で世間に出て、考え、思い。動き、等々な。操縦しておるのは自分だ。だから、私には連続性がある」

「そうですねえ」

「いや、それだけの話だが、今日もその自分をやっておるのだなあと、最近つくづく思う」

「自分について、自分で思うわけですね」

「そうだね」

「さらに、またそれを包むような自分が、また思うとか」

「ああ、それが一本線で、多少は分裂するが、人生は一回きりだよ。だから連続性がある」

「もし連続性がなかったら？」

「納得できんだろ。いきなり年寄りになっているんだからね」

「はい」

「まあ、何でもない話だよ。特に言う必要はなかったがね」

「はい」

了